大阪市・湖崎眼科

IPS旅行

湖崎　弘

テーマに時代の流れひしひし

IPS（International Perimetric Society 国際視野研究会）の第6回シンポジウムがこの5月にイタリアのセント・マルガリータで開催された。

第1回パリ1974年は私は出席できなかったが、第2回西独チュービンゲン1976、第3回東京1978、第4回英ブリストル1980、第5回米サクラメント1982と2年毎に開催され、私はそのすべてに演題を提出してきた。

会長は初代はアウルフォン教授（西独チュービンゲン大学、緑内障視野、両眼視の方面で有名）であったが、今はドランス教授（カナダ、ブリティシュコロンビア大学、緑内障の大家）である。理事会は各国の学者で組織され、メンバーは視野の業績が必要で、約200人のうちアメリカに次いで日本人の会員が多い。勿論、非会員の傍聴も可能であるが発表は会員に限られている。日本からの理事には松尾教授（東京医大）、北原講師（慈恵医大）の2人が入っている。今回の主宰者はジンジリアン教授（伊、ジェノバ大学）であり、10周年記念で会期も1日多い4日間となった。プログラムは表の通りであり、テーマが神経眼科、緑内障のレギュラー以外に自動視野計、色視野、労働視野が選ばれているのは時代の流れを示している。

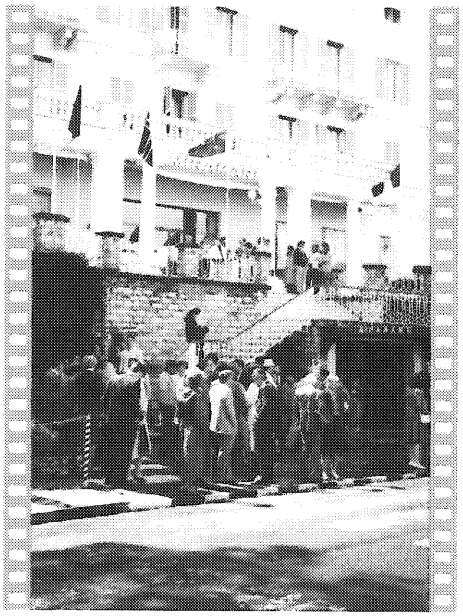
会場のあるセント・マルガリータは長靴の形をしたイタリアの膝頭に位置する保養地で、フランスのカンヌ、ニース、モナコと同じ海岸線上にある。

今回の日本からの参加者は約20人と少なかったが、松尾教授夫妻（東京医大）、松崎教授夫妻（慈恵医大）、鈴村教授父子（愛知医大）、北原講師兄弟（慈恵医大）、可児助教授（兵庫医大）、古野講師、遠藤先生、ORTの原沢さん（東京医大）の外に大阪から中谷君（大阪厚生年金病院）、私ら夫妻が何時ものレギュラーメンバーであった。

◇――◇

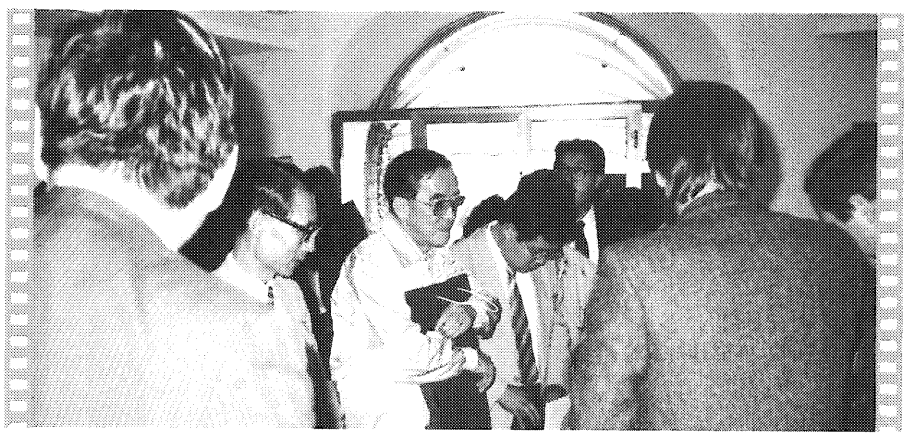
⇐出発　成田で全員合流。正装の松崎教授（慈恵医大）夫妻と極めて軽装の松尾教授（東京医大）夫妻。コントラストに驚かされる。ルフトハンザの南回りで、20時間かかってフランクフルト着。ヨーロッパへの飛行機旅行は現代における最大のゴーモンだ。釣用のチョッキ姿の松尾教授の服装は正解であった。

⇒まず会場へ　フランクフルトで乗りかえてミラノまで1時間。それからバスで2時間半。家を出てから35時間後にセント・マルガリータのホテルに着く。徹夜麻雀の朝よりつかれていたが、さっそく学会場のホテル「ミラマレ」の下見聞に…。



⬆瀟洒なホテル　「ミラマレ」は町の西端にあり、道一つ隔てて前は海岸。主なメンバーはここに泊っている。我々は申込みが遅れ山の手のパークホテル「スイス」に宿泊。しかし見晴らしはよかった。

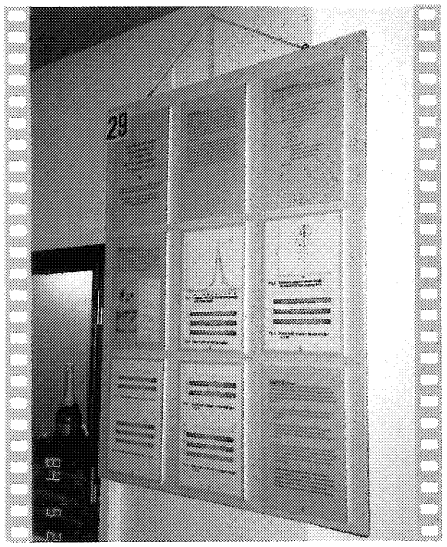
	Sun., May 27	Mon., May 28	Tues., May 29	Wed., May 30	Thurs., May 31
8.00		Registration: 8.00-11.00			
9.00		Welcome & Opening Remarks	Session IV Colour Perimetry	Session VII Ergoperimetry	Excursion to Pisa Guided Tour of Pisa
10.00		Session I Automation 1	Business Meeting	Session VIII/1 Free Papers	
11.00		Coffee break	Coffee break	Coffee break	
12.00		Session II Automation 2	Session V Neuro-ophthalmic Perimetry 1	Session VIII/2 Free Papers	Lunch in Pisa
13.00		Session III Fundus Perimetry	Session VI Neuro-ophthalmic Perimetry 2	Session IX Poster session	Trip to Torre del Lago
14.00	Registration	Lunch	Lunch	Lunch	
15.00					
16.00		Social event: Excursion to Genova Visit to sites of interest	Social event: Excursion to Portofino and S. Fruttuoso	Session X Glaucoma	
17.00				Social event: Excursion to Camogli	
18.00					
19.00	Reception & Buffet in S. Margherita L. (Villa Durazzo)	Cocktail (Martini Terrace)			End of meeting
20.00		Dinner in Genova (‹Tunnel› Club)	Dinner in S. Margherita (Covo di Nord-Est)	Dinner in Camogli (Cenobio dei Dogi)	
21.00					
23.00					



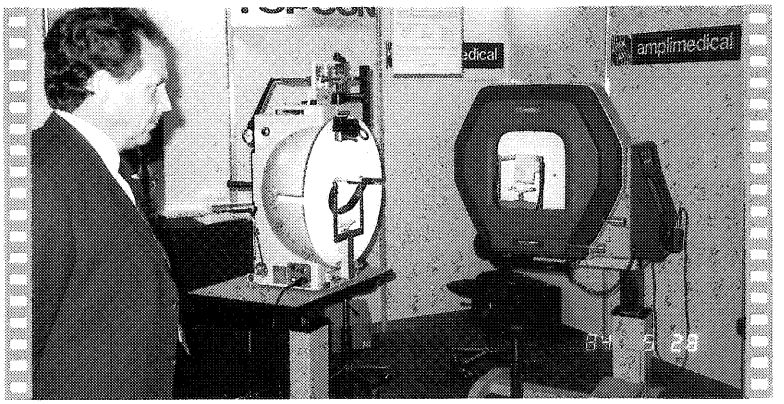
➡登録　全員そろって登録に。受付事務は例によってスローモー。日本とは比較にならない。だが、第2回シンポジウムでの受付（2時間かかった）よりは能率よく運ばれた。松尾教授、松崎教授、鈴村君（愛知医大鈴村教授の令息）の顔が…。

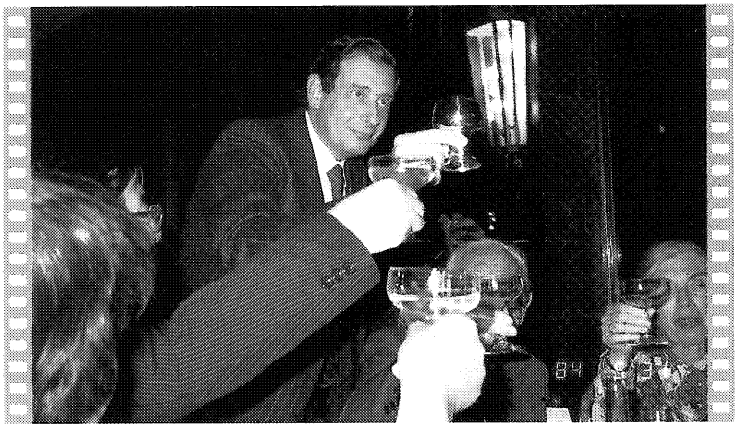
⬅旧交を暖める　その夜は恒例のウエルカムパーティ。会場は壮麗なうらやましくなるような建物。定刻に行くも例によって食べものも飲みものも残っていない。2年ぶりにメンバー達と旧交を暖める。一時危篤を伝えられたアウルホン教授（西独・チュービンゲン大学）の顔が4年ぶりに見られ、なつかしかった。

私の学術展示　私は2年前、サクラメントでの展示が貧相だったので、今回はプロの手を借りてカラフルなものを作成。内容がよかったのか、カラフルなためか、反響が大きくハイレ教授、グレーブ教授（オランダ）、マーミオン氏（イギリス）その他多数の人から質問攻めに…。



英語に苦しむのは日本人だけではない　会場はホテルの中の一室。参加者は約100人のこじんまりした研究会。言葉はもちろん英語のみ。ヨーロッパ人に比べて日本人の英語はましな方。一番ひどいのはイタリア人の英語。中央にターバン姿のハイレ教授（アメリカ）の姿が見える。





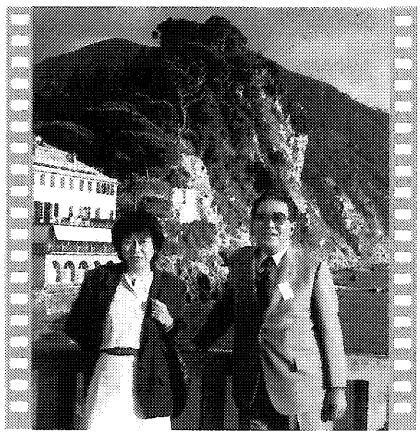
日本の学者は売り込みが下手
機械展示の一隅にトプコンのブースがあり、可児助教授（兵庫医大）が開発した自動視野計が展示されていた。私は試用したのでその優秀さがわかっていたが、機械のデザインが悪く、カタログも白黒で反響はもう一つ。日本人、ことに関西の学者は売り込みが下手である。

恒例の各国ノド自慢　この研究会は2年ごとに殆んど同じ顔ぶれが集まるので、家庭的雰囲気が特長。必ず各国ノド自慢がはじまる。写真は主催国イタリアのグループ。2番目に人数の多い日本グループは松尾教授の独唱と、全員でサクラ、サクラの合唱、しかしこの歌はおとなしすぎる、次回はもっと景気のよい歌にすべきだと、みなの意見が一致。

学会長のジンジリアン教授（イタリア・ジェノバ大学）　彼とは1976年チュービンゲンでの第2回研究会で、同じホテルに泊って以来の付き合い。無口だが（英語が下手なため）、ユーモラスな人物。毎回テープレコーダー持参でイタリアのカンツォーネを歌う。

➡大小のヨットがずらり　セントマルガリータは、カンヌ、ニースと同じ海岸に並ぶ保養地。港には瀟洒なヨットがずらり。こんな舟を持つのはイタリア人では珍らしくないのかもしれないが、我々日本人にはヒガミのタネ。

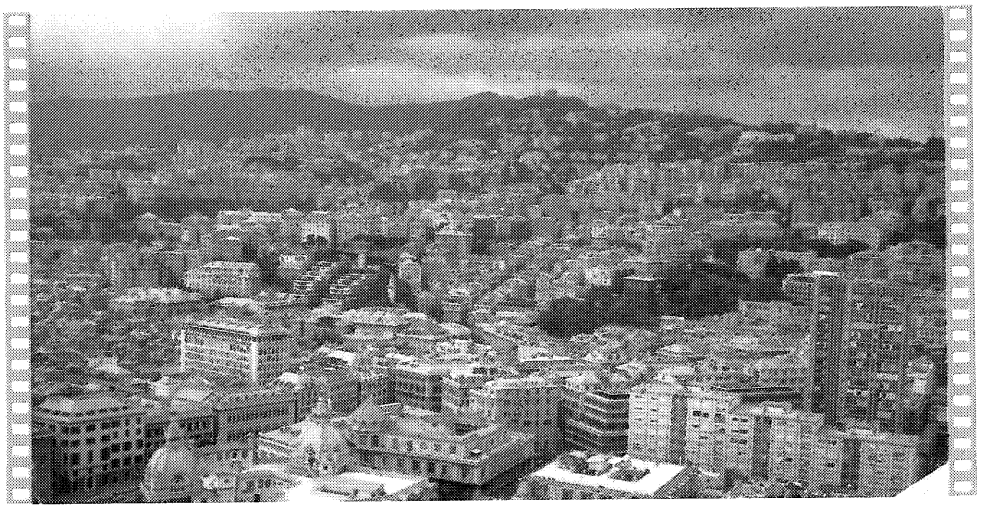
➡防寒具を買いに…　会長の案内文にある〝青空〟とは全くサマ変って、にわか雨、時にはヒョウまで降る悪天候つづき。寒くて、私はチョッキ、女房はカーディガンをさがし歩いて買った。私は長い靴下も買ってそれをはいて寝る始末。女房は旅行社の松崎君に付き添ってもらい、一枚買うにも何軒も何軒も…。



⬆家内と二人で　学会は4日間だったが、毎日午後はエクスカーション。近くの景色のいいところへ案内してくれる。学会3日目Camogliでホッとした我々2人…。

➡食道楽の松崎教授　セント・マルガリータは海岸の町だから魚介類が豊富。写真は松崎教授夫妻と北原講師（慈恵医大）。教授は案外の食道楽で、毎夜うまいものをさがして食べ歩かれたようだ。この時は教授の推せんで伊勢えびを食す。さすがに美味。私はスパゲティモンゴーレが気にいって、3日つづけて食べた。日本と異なりあっさりした味つけ。

➡美しい港をバックに　Portofinoは絵に描いたような美しい小さな港。それを背にして、左から松尾教授夫人、原沢君（東京医大ＯＲＴ）、ドランス教授（カナダ・研究会会長）、松尾教授、松崎教授、同夫人、私の家内。



➡白い建物が夕陽に…　学会長のジンジリアン教授が勧めるジェノバ市。神戸と同じように山を背にしたせまい海岸ぞいに建物が林立している。イタリアは大理石の産地なので建物はすべて白。それが夕陽に美しく映える。

➡ピサの斜塔　最後の日のエクスカーションはピサの斜塔見物。想像していたよりも傾斜がひどい。一番上まであがれるが、すべりそうなので敬遠した。毎年、幾らかずつ傾斜がひどくなっており、西歴二千何年かには倒れる予定？

⬅プッチーニの生家　ピサの近くにある。彼はマダムバタフライの作曲者であり我々にも親しみが多い。ここのガイドは極めて横柄で、きっちり20人ずつしか入場させない。会長のドランス教授が案内人の説明に耳を傾けず、室内を見て歩いていて彼からこっぴどく叱られた由。

➡ミラノのアーケード街　日本とちがって各階が高く、これだけ天井の高いアーケードは日本では見られない。世界のファッションをリードするミラノだけあって、大阪・心斎橋筋の3倍ぐらいある商店街の半分がブティック。女房は目移りしてとうとう何も買えず、私はさがし回ってやっとグッチで鞄を一つ買う。

⬆各地に大きな教会が　最後の日にミラノに一泊。壮麗な教会（ドゥオーマー）が町の中央にある。イタリアはカソリックのお国柄で、各地に大きな教会があり圧倒される。イタリアは誠に歴史の国で大きな建造物に取りかこまれ、かえってそれが発展をさまたげているように感じたのは日本人のひがみか。

千寿製薬発行（銀海）1984年